

# ホスピタリティアート・プロジェクト ーワークショップ・展示 ～金沢市立病院における実践から～ その2 The Hospitality Art Project Workshop Report (2) ー Art Practice and Exhibition at Kanazawa Municipal Hospital ー

三 浦 賢 治  
MIURA Kenji



撮影 品野與四寛

## 1. はじめに

金沢市立病院と金沢美術工芸大学（以下、「金沢美大」）の連携事業「ホスピタリティアート・プロジェクト」（HAP）は、金沢美大における平成 21 年度～23 年度特別研究に採択された「金沢市立病院と金沢美大との共同プロジェクトー医療とアートの協働による創造的なコミュニティ・サービスの可能性についてー」および「ホスピタリティアート・プロジェクト 1、2」として、アート、デザイン各分野の側面から、計 10 回の企画とそれともなう展示・発表を

とおして実施された。本稿では、筆者が担当として携わった 5 回の企画に加え、研究の発展的な試みとして行なった発表・展示をとおした視点から、ホスピタリティアート・プロジェクトの意義と今後の可能性について考察する。金沢美術工芸大学紀要第 56 号で述べた平成 21 年度～22 年度の実践報告に引き続き、以下に記述する。

## 2. ワークショップ・展示 平成 23 年度

平成 23 年度の活動を順に列記し、実践報告とし

て振り返っていく。

① 光の回廊シリーズ (その3) 《オアシス》

日時 8月29日(月) 10:00~17:00

30日(火) 9:30~16:00

※ 29日~30日午前までは美大生による制作。

患者参加のワークショップは30日1:00PM  
~4:00PMのみ。

場所 金沢市立病院1階待ち合いホール大ガラス  
付近

② アートミーツケア学会 2011年度総会・大会

日時 11月26日(土) 17:00~17:30

27日(日) 10:00~10:20

場所 京都造形芸術大学

京都・瓜生山キャンパス

内容 26日 実践報告 パネル発表

27日 実践報告 プレゼンテーション

「ホスピタリティアート・プロジェクト  
-金沢市立病院における実践-」

③ 美大アートワークス 2011

日時 12月1日(木)~11日(日)

場所 金沢21世紀美術館市民ギャラリーA

内容 1日~11日 パネル・ビデオ展示

4日 13:30~14:20 ミニレクチャー

「ケアの時代が求めるアートのかたち」

横川善正教授 三浦賢治准教授

山本和弘 栃木県立美術館特別学芸員

活動記録

① 光の回廊シリーズ (その3) 《オアシス》

ホスピタリティアート・プロジェクト全体としては第7回にあたる今回は、3度目となるカラーセロファンを用いたスタンドグラス制作のワークショップ・展示である。プロジェクト参加学生は昨年度まで活動の中心を担っていた学年が卒業したのに入れ替わり、新たに学部1年生7名が加わった。

今年度の美大での第1回会議は昨年と比べて10日程遅い平成23年8月2日(火)に行い、ワークショップと展示の内容を話し合った。前年の「夢の水族館」が病院内外の関係者から好評を博したこともあり、ワークショップの運営、作品の質のさらなるレベルアップをめざして企画に着手した。

学生スタッフによる企画会議では過去2年の例に習い、ディスカッション形式で意見を交換したが、医療環境での制作展示であることの、ある種表現上の制約が発想の幅を狭めた。

ワークショップによるコミュニケーションがプロジェクトの目的の中心でありながらも、その後には結果として制作物が残る。期間限定の展示であれ、病院の空間にいくらかの視覚的影響を与える以上はその内容と質への配慮は必要である。

いくつかの意見の中から、前年の水中の生き物に対して、今度は陸上の空間を表現することを前提に考えることに落ち着き、次回の会議までに各自が図案を考えて持ち寄ることになった。

8月8日(月)の会議では、持ち寄られた図案をもとに、制作のコンセプトについて話し合い、誰かの口からついて出た一言で、今回の表題を草原の水辺に生き物が集う「オアシス」とすることになった。

よく耳にする単語ではあるが、病院の場においては開放的なイメージで解釈可能であると感じられた。オアシスに集う動物たちはキリン、象、フラミンゴ、シマウマ等の親しみやすいものにした。また、ガラスの上方が空になり、絵の主役が地上の動物になると、絵の重心が下方に偏りがちになることが予想されたので、空の部分に虹や飛行船を配する等の工夫をした。(図1、2)

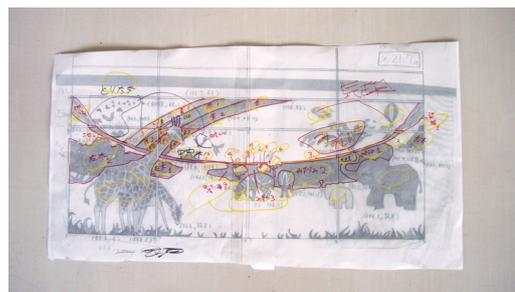


図1



図2

今回の企画で苦勞したことは参加学生の確保であった。延べ人数では16名いたが、人手が必要な準備日に参加者の都合がつかず、少ないスタッフに負担をかけることになってしまった。

病院での制作、ワークショップは学部1年生も加わり、作業は順調に進められた。(図3)

一方で患者とのワークショップに顔を向けず作業のみに没頭し、病院空間での会話としては、時折賑やかになってしまう様子が当初見受けられたようである。その一因として、1年生の中にはワークショップのみの参加者が多く、予め慣れない空間での初めての作業に際しての留意点の確認や、ホスピタリティアート・プロジェクトのコンセプトを伝え理解してもらう機会を持てなかったこともある。企画監修する立場として、日程調整をふまえた計画性の大切さを痛感した。



図3

ワークショップは患者、病院関係者が会場に集い、報道関係各社の取材もあって、会場となった待ち合いロビーには前年同様の活気がみられた。前年参加

した学生は要領を得た対応で患者と接し、後輩の1年生もそれに習って大学での授業とは異なる環境での制作を楽しんでいるように見えた。一人でいくつも動物を切り取る子供や、患者や付き添う家族の穏やかな笑みがみられた。(図4、5、6)



図4



図5



図6

病院での二日目を終え、片付けをして帰ろうとする時、患者の付き添いと思われる女性から、学生スタッフに「夢をありがとう。」と声かけられていた。

普段ならどこか気恥ずかしいと感じられるような言葉であっても、その場では素直に受け止めることができた。

後日、晴れた日の午後を選び、完成したステンドグラスの記録のため写真撮影をした。その時に分かったことは、やはり象、キリン等の主役たちが絵の下方に偏っていたため、日光が正中に来た時の色彩の床面への映り込みが少なかったことである。今回の経験を踏まえて次回作の構図に生かしたい。また、スタッフの人員不足により、今回は入院棟各階の休憩スペースの窓を飾ることができなかった。

企画ごとに学生が綴ったプロジェクトの感想に目を通してみると、自分たちは何かを与えたのではなく、与えられたのだという感覚が、学生達に余韻として残っているように感じられる。

「患者さんが『病院に来てからこんなに楽しかったのは初めて』と言ってくれた」、「患者さんの長い入院生活の最後の日に、一緒に作品を作れたことが私はとても嬉しかった」という感想とともに、「患者さんや来院者の方が予想以上に積極的」であり、「こちらが何かをしているように見えて、実は自分が色々な考えや経験や感情をたくさんもらった」と実感する。

それは東日本大震災の復興支援ボランティアに参加してきた学生の報告で、彼らが被災者との交流から受けた「逆にこちらの方が励まされた、何かをもらった」という感覚に似ている。震災に遭われた方々と病を抱える患者とは、置かれている状況は同じではないが、どちらもそれぞれの困難と向きあっている。

### アートの役割として

少し本論から逸れるが、平成23年度新学期を迎えた授業に際して、教室に集まった学生たちの表情に影を感じた。市民生活の全てを根こそぎ奪った大震災の現実に、或る種の無力感や学業が許されている状況に対する罪悪感、自らの存在理由が揺らぐよ

うな思いに駆られていたのは、筆者に限らず学生も同様であった。

授業に先立ち、学生たちに「いま必要とされているのは、医療や食料や衣服、お金、住む場所だと思う。でも、時間が経って少し落ち着いた頃に、おそらくきっと人はかたちと色彩が欲しいと考える。だからその時のためにもわたしたちは美術の勉強をする意味がある。」と言った。

筆者にそれを言わせたのは、病院でのプロジェクトを通して、人の創造的活動が根源的な、本能的なレベルで生命力を喚起し、たとえ一時でも患者とその周囲の環境に対して何らかの変化を与えていく場面に居合わせたことに起因している。

加えて述べるとすれば、病院で展開されるワークショップ空間が与える効果は、美大学生と患者の関係のみに留まらず、場を共有する医師や看護師、病院職員にも少なからず影響を及ぼしていることが指摘できる。(図7)



図7

「毎日展示の横を通るのが楽しみ。」という声からも、医療空間におけるアートの役割は、患者の痛みと孤独を軽減させるだけではない。アートはそこで働く人にとっての気分転換や活力の糧として機能し、病院全体のホスピタリティ空間の構築に相乗的な効果を担う要素として関与しているのである。

### ② アートミーツケア学会 2011年度総会・大会

#### (京都) 実践報告パネル展示、プレゼンテーション

筆者自身の問題として、医療分野における芸術表現の可能性と実践の状況についての見識を深める

目的で、アートミーツケア学会 2011 年度総会・大会（京都大会）に参加し、実践報告のパネル展示、プレゼンテーションを行なった。

11月26日(土)に京都造形芸術大学京都・瓜生山キャンパス会場における実践報告パネル展示では会場で説明を行い、ノートパソコン画面でプロジェクトのドキュメント映像も流した。参加型のワークショップに興味を示す来場者も少なくなく、質問を受けた。

27日(日)に「実践報告：ホスピタリティアート・プロジェクト－金沢市立病院における実践－」と題してプレゼンテーションを行った。大学講義室に訪れた来場者からはホスピタリティアート・プロジェクトについての質問、感想が相次ぎ、実践形式の参加型プロジェクトのあり方が興味深く受け止められたようである。(図8、9)



図8



図10



図9

③ 美大アートワークス 2011  
パネル展示、ミニレクチャー

金沢 21 世紀美術館において、それまでの HAP 全体の企画のパネル・ビデオ展示（図 10）と、ミニレクチャーを各ブースで行なった。

横川教授がホスピタリティアート・プロジェクト座長として、活動の目的や経緯についての総括的な説明を行った。次に筆者がスライドによって、プロジェクト全体の紹介とこれまでの活動の中からいくつかをピックアップして上映しながら自分の考えを述べ、関連資料も配布した。スライド上映の後に、山本和弘氏からプロジェクトについての感想が述べられ、「厚生芸術」の側面からその意義についての見解と解説が加えられた。実践報告とプロジェクトについての客観的視点による解説の融合は、ミニレクチャーの内容に奥行きをもたらず結果となった。発表時間の都合により、発表内容に関心を示す来場者との質疑応答の時間が持てず残念であった。

### 3. ホスピタリティアート・プロジェクトの応用と展開

#### 教育効果としての「もの」「こと」「ひと」

前にも述べたが、一般に「ホスピタル・アート」と云われる芸術表現活動の多くは、作り手が医療環境にアートを提供する形態で行なわれる傾向にある。本稿で述べてきたホスピタリティアート・プロジェクトの活動は、制作する側にあるアーティストのみならず、患者、医療者が共に積極的に関わる「参加型プロジェクト」として、アートの持つ潜在性と可能性を引き出すところにその独自性がみられる。

これからの活動においては、その特徴を発展的に充実させ、ホスピタリティアート・プロジェクトのさらなる展開と応用を検証し、蓄積していくことが重要である。

それは、プロジェクトの意義が、地域社会にむけて果たす社会貢献としての役割を持つ一方で、大学においてはその研究結果を教育効果として見えるかたちで教育システムに還元していく必要性を併せ持つからである。そのためには医療空間におけるアートの効用についての客観性を保証する評価基準が求められるが、プロジェクトにおける制作行為を数値化することは難しい。

つくる行為によって残るのは「もの」と「こと」であり、その結果に対する評価の多くは主観によるものである。アーティストが評価の如何に関わらず延々と制作を続けるのにも似て、客観的根拠のない評価は自己評価であり、本論のような考察も現状においては感想または実践報告の域を出ないのかもしれない。

しかしながら、医療面での効果について検証していく術を探り、その関わりのなかで医療分野におけるアートの価値を位置付けていくことで、医療環境におけるアートの積極的な導入についての道筋を付けることは可能であると考えられる。それらの状況が整ったその先に、新しい表現分野で活躍する人材としての「ひと」づくりへと繋がっていくイメージをもつことが出来る。

金沢美大においては、美術、デザイン、工芸各科の学生が有する芸術表現に関する潜在的な能力を、卒業・修了後のキャリアとしてのケアの領域での活動を可能にさせる場を開拓し、さらには新しい医療環境の創出にともなう芸術表現領域の確立へと繋げていく意味において、今後はプロジェクトの単位化をはじめとするカリキュラム面の方策を講じる必要性が考えられる。

金沢美大と金沢市立病院の連携によるプロジェクトに限らず、芸・医連携の動きは今後留まることのない広がりを見せていくことであろう。医学域においては、医療の分野で蓄積した知識と実績を活かし

た、医学生のOT教育を芸術面から補完する医療教育領域の設立をめざすことに繋がり、これからの高度医療福祉社会のニーズに対応する姿勢として注目されていくと予想される。

そしてこの研究成果は、デザイン分野においてもより先進的、機能的な医療・福祉機器の開発へとむかい、立ち返って新しい芸術表現の一分野としての姿を具現化させることが期待される。

#### 4. おわりに

大学の特別研究としてのホスピタリティアート・プロジェクトの取り組みは平成23年度をもって一区切りであるが、平成24年度において金沢市立病院では複数のプロジェクトが進行中であり、金沢美大との連携も継続している。筆者も個人の研究活動としてのほかに、病院からの発案による企画にも参加している。

今後の活動について、大学と病院は連携を深め、継続的にプロジェクトの理念を社会と共有していく努力が必要であろう。そして筆者の課題としてあげられるのは、ホスピタリティ・アートについての理解を深めることである。美術大学の実技系教員としての視点を踏まえつつ、ひとが何かを創る行為の意味についてこれまで以上の洞察と見識を持つ姿勢が求められると感じる。同時にプロジェクト・コーディネーター（自身の中では「段取り係」と受けとめているが）としてのスキルを上げること、そしてプロジェクト参加学生の確保は必須であろう。

専攻間の連携を深めていくなかで、ホスピタリティ・アートの紹介に努め、少しずつ活動の裾野を広げていきたいと考えている。自分がそうであったように、学生にとっても、アートとは何か、表現とは何かという命題に向き合う際の、新たな視点を見出す機会になるかもしれない。

平成21年度～23年度にかけてのHAPワークショップ・展示企画は、大学と病院の連携による成果であるが、それを可能にさせた大きな要因のひとつ

つは、協力学生たちに備わる細やかな感性と自由闊達な実行力であった。プロジェクト企画ごとに、献身的に従事してくれた学生スタッフの氏名を順に記し、了としたい。

平成 21 年度～23 年度 ホスピタリティアート・プロジェクト ワークショップ・展示企画 協力学生  
※学年は当時

2009 年 10 月 25 日、26 日

H A P 第 1 回 光の回廊シリーズ (その 1)

《ロビーを彩る光のアート》

油画専攻 3 年 井上 俊 加茂那奈枝 谷村祐美  
佐藤美奈子 浜崎恵利 湊 良太  
中條美和子 福井美穂 森山理絵  
山口 新  
4 年 長屋さゆ美

2009 年 12 月 24 日～26 日

H A P 第 2 回 《似顔絵をプレゼント。》

油画専攻 1 年 島 小織 竹政胡桃 野一色彩  
森 千咲  
2 年 山本愛子  
3 年 森山理絵

2010 年 2 月 18 日、19 日

H A P 第 3 回 《万華鏡ワークショップ》

油画専攻 2 年 渡邊里美  
3 年 井上 俊 加茂那奈枝 湊 良太  
佐藤美奈子 出村美奈 浜崎恵利  
山口 新  
日本画専攻 3 年 高橋克典

2010 年 8 月 26 日、27 日

H A P 第 6 回 光の回廊シリーズ (その 2)

《夢の水族館》

油画専攻 1 年 竹内佑未  
2 年 島 小織 竹政胡桃 徳山貞幸

野一色彩 長谷川愛 三浦 萌

森 千咲

4 年 井上 俊 佐藤美奈子 谷村祐美  
中條美和子 出村美奈 浜崎恵利  
森山理絵

2011 年 8 月 29 日、30 日

H A P 第 7 回 光の回廊シリーズ (その 3)

《オアシス》

油画専攻 1 年 大田 香 小林大地 濱出ひかり  
早川 桜 早川 璃 福井伶奈  
米田 雅  
2 年 竹政胡桃  
3 年 島 小織 徳山貞幸 野一色彩  
長谷川愛 森 千咲  
修士課程絵画専攻油画コース 1 年  
浜崎恵利 湊 良太 森山理絵

(みうら・けんじ 油画)

(2012 年 10 月 31 日 受理)

